
神は俺を不幸にした。

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は俺を不幸にした

【NZコード】

N8212X

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

「神と出合つて不幸になりました」

神との出会い

俺は意識が戻る。ここはどこだ？人の声も車の音も聞こえない、目も重くて開けられない。

俺は確かに、車に撥ねられそうになつて子供を突き飛ばして助けようとして・・・あれ、その後が思い出せない。

思い出せるのは、俺はそんな人助けをするよ、な人間ではなかつた
ということだけだ。ふふ、一種の気の迷いか、それとも子供だつた
からか、と考えているとどこからか老人の声が聞こえてきた

「おい、聰史起きんか」

あれ、不思議だ。老人の声が聞こえたと同時に目が軽くなったぞ？
ん～誰だろう、と思いながら目を開けるとそこには
重そうな杖を振りかぶつて今までに俺に振り下ろそうとしている爺
さんがいた

俺が横に転がつて回避したと同時にすごい地響きがおこつた。何事だ？！と今居た場所を見るとそこが粉々に砕け散つていた。この爺さんどんだけ桁違いな力してんだ？！と思つていると、その爺さんが俺の方を向いて、にかつと笑いながらこう言った

「お主はもう、死んでおる」

何それどういう事？え、何で北の拳みたいな事を、見知らぬ白髪のお爺さんに言われないといけないの？！

ちょっと待て落ち着けミィー、クール、クール、クール、まずは相手に何者なのかを聞かなければならぬ

「えつと、貴方は何者ですか？」

「ん~、ワシが、ワシは神じゃ
「へえ、モーなんだー（棒読み）」

「何故、棒読みなのじゃー」とすゞい剣幕で怒つていい神を無視しながらこの空間から脱出する方法を考える。考えてみて「神」とやらに聞いてみるのが良いと、思い立つたので「神」に聞いてみた

「なあ、神。」

「それは、神に対する態度なのか?と、思つのじゃが言つてみ
「こつから出るにはどうすりゃ良いんだ」

「それはな、お主の意識の中にこれからわしが住んでもいい、とお
主が誓えばよい」

なんだ、そんな簡単なことか、と思いながら俺は誓つた

「よし、これから神が俺の意識の中に住む事を許可しよう」
「・・・まあ生き返らせてやれ」

と神は言った。

そして、光つた、ええ!?と思つてている内に俺の中に光が入つた。
そして世界が暗転した。

はつー、と気がついた時、俺は、ユリの花の匂いに包まれていた
・・・まさか、まさかそんなタイミングで生き返つたんじゃないよ
な。生き返つてないと信じたかったが俺は、「ふた」を持ち上げて
外を見るとそこは俺の葬儀場だった。

それを、見た瞬間込み上げてきた言葉を空に言い放つた

「この、糞神がああああー!」

幼馴染と神と俺と

：朝 家

神、と生き返る為の取引をしてから一週間。

俺は、激動の時代を生きたかのように疲労困憊している。神の生き返らせるタイミングの悪い事、俺は棺桶に入れられた直後に、生き返ってしまった。そのせいで新聞には、「棺桶に入れられた直後に生き返った奇跡の少年!」などと書かれ、さらには、テレビにも引っ張りだこで、ここ五日間全く寝ていない。

俺は、「芸能人って、テレビに出て楽しく騒いでるだけで、金がもられる楽な仕事」だと思っていたので、「岡は、なんで鬱なんかになつたんだろう?」と、とても失礼な事を考えていた自分を恨んだ。

今なら分かる、こんなにもつらい仕事をしていれば鬱になる、と。だが、無情なことに学校は行かなければならぬ。俺が行つている学校は、カトリック系の学校で、不良なんかはいない、みんな偉い、たいして事件も起きてない、俺の生き返りを除いては。

(おーい、聴史。聞こえてるか?)

うお、何だこの頭の中に響いてくる声は!・・・つてな。この声には聞き覚えがある。この弱々しい声は・・・

「ちひり、くそじじいか」

おそらく自分にしか聞こえない声であろう、という声で呟いたはずなのに頭の中に返事が返ってきた
(クソじじい、とはなんじや!別に寿命を縮めたっていいんじやぞ!)

までたよ。寿命を出して脅すの

「てめー・・・寿命で人を脅すのなんか神じやねえんだよー何か、言い訳があるなら言つてみひー!」

(・・・)

あつ、認めた。

俺は、神を言い負かした優越感に浸りながら、学校の制服に着替える。ちなみに、学校の制服は普通のブレザータイプ、どこまでも普通だ。

俺は眠い目を擦りながら階段を下りて、軽い朝食を作り、一人で食らう。

俺の家族は3人家族で、俺、母さん、父さんの3人で構成されている。父は超スーパー・エリート、母は超美人、俺は・・・頭はかなり父親の血が入っていて、外見は・・・残念な事に母の血がちょっと入った感じだ。

みなまで言わせるな。

そんな事を、考えながらスクールバッグを担ぎ、家を出た。

：登校の道

「おっはよ～～！！」

「うおっ！俺は、突然後ろから来た何かのせいで、前のめりに倒れた。
「いってえ～」と、言いながら後ろを見ると、えっへん～～という効果音が聞こえてきそうな笑顔を浮かべる、幼馴染の姿があった
「おい、佐奈。お前いい加減やめろって。」

「いいじゃんか。けち～。あつ、そうだ聰史～・・・」

「何だ？」

（おい聰史。今から、その佐奈といつやつはお前ことびつ～・・・
「ん？何だ」

神に聴いた瞬間、佐奈が俺に飛び掛ってきた

「I LOVE 聰史！～！」

俺は華麗に避けた

「ぎやーーー」

なさけない悲鳴をあげながら飛んでいく佐奈。

それを、無視して俺は学校へ行こうとした所を神が叫んだ
（おいつ！いいのか本当にいいのか！？）

「いいんだよ、どうせ士郎のところに飛んでいくんだから
(士郎というのは誰なのじゃー!といふか普通見捨てんじゃねーがー
ー.)

「 もひいいからー。」

結局、俺は学校に遅れた大遅刻だつた。

：放課後

「おーい、聰史ー。一緒に帰るー。」

今は、授業も終わつた放課後。俺は佐奈と一緒に帰る約束をしていたので、一緒に帰るところだ。

今日よりひどい日は無かつただろうと思ひ。授業中、ずっと神が、(こんなのも分からんのか)だの(それは、違うー)だの、ずっと言つてきて最終的に、「おんどりやあ、黙つてひーーーーーーーー」と、叫んでしまい、クラスの皆から白い目で見られた。

俺が、返事しなかつたのが不満だつたのか、佐奈が、ローキックで俺の脛を蹴つてきた

「痛つ！分かつたからやめる！」

「ええー、まだまだ蹴つてたかったのにー」

「お前、本当に俺の事が好きなのか!?」

本当によく分からんやつだ。

俺が佐奈とじやれあつてると、前からもう一人の幼馴染、士郎が來た。

士郎とは、佐奈と会う前からの幼馴染で、一言で言つと運動部のイケメンだ。そんなのが、じけうにすげい顔で、すごいスピードでダツシューしてきた。

「部活を作つたんだけど、はいってよーーー！」

はつ?と、思った瞬間、士郎はダツシューの勢いを殺さずに完璧なパ

ンチを、俺の鳩尾に決めていた

「なつ・き・・・きさ・・・ま、お・・れ・・を裏切つた・・なあ」

その一言とともに俺の意識は、地の底へ落ちていった。

幼馴染は俺を部室に連れ込んだ

7

俺は、鳩尾の辺りにある不快な痛みで目が覚めた。

卷之三

「あつれ、起れやつた？」

『あつれー、起きちゃつた?』じやねえよ! お前今何しようと

七
た
」

違う! 絶対にそうに違ひない。

だが佐奈は、俺の予想の、右斜め上の答えを言つた。

ー
ん?
ああ、士郎に教えてもらつた
スター・ダストフレス
を、

「御用」の「御」は「お」の意

本当に危ない！！ と言うか スターダストプレス できんの！？

から幻の技と呼ばれるものである……あれ？ 今、頭の中で勝手に説明が流れた様な？

（よつ。前回、超疎外感を感じた神だ。）

またシシイが、ど 神に文句を言おうとした時、俺は神の口調が変わっている事に気がついた。

(黒川ぐそシシイ)
(相変わらず酷くない!?)

う……つ、う……つ、もう元に戻すわ……うう。と神が嘆いている間に、俺は、今いる部屋を眺めた。

俺は学校の事については人一倍知つてゐるつもりだったのだが、この部屋は見た事がなかつた。

まず、壁、床、天井、全てコンクリートがむき出しだ。

だが、ソファやテレビ、ＨＡＣＫにゲーム、ラノベにパソコン、さらには、部屋の隅にトイレの個室みたいなのがある。

十分ここで暮らさせていけそうな設備が揃つている。

「おい佐奈。ここはどこなんだ？」と佐奈に聞こうとした時、部屋の入り口から（横にスライドさせるドア）士郎が入ってきた。士郎とは、俺の幼馴染で佐奈と知り合つ前からの付き合いだ。

……俺とは違い、すぐイケメンだ。

くそつ！ 何で俺はこんな普通で、こいつらはルックスが良いんだ！ 自分で言つて何だか悲しくなつてきた。あつ、ちょっと涙が……

ガラガラッ

何だ？ 人がすぐ悲しくなつてゐる時に、と振り返るとそこには、士郎がいた。

「ああ、起きたのかい聰史」

「うおらあーーー！」

「あつ、こんな所に佐奈がいる」

スカツ

「 「 …… 」 」

なん……つだつ……て。俺の長年の恨みがこもつたハイキックを避けただとー？ 完璧な不意打ちだったのに、と俺は驚愕した。

角度、早さ、パワー全てにおいて完璧だった蹴りをかわされたという事実は、俺にとつて結構なダメージになつた。

そんな俺を見て士郎は、そのイケメンフェイスに微笑をたたえながら、「ふつ、甘いね。」と言つてきた。

……かなりイラッとした。

こいつが微笑をたたえると、周囲のものが色あせるのだ。まあ、コンクリートだから元から色褪せてるんだろうけど。

俺と士郎が睨みあつていると、佐奈が「もうそんな事いいから部活やろうよ」と駄々をこねた。

……「もうそんな事」ってひどくない？ 結構俺にとつては大事な事なんだけどな。

あれ？ 何か聞こえてはいけない事が聞こえたような？ 部活つて聞こえたような？

そんな疑問を抱いていると、士郎が言つちやいけない事を言つた。

「さあて、部活しそうー。」

はつ？

俺の日常は神と幼馴染によつて壊された。

「おい、椎名」

「何ですか？」

「三話目あんま進んでなくね」

「そうだね」

沈黙

「「何、この付録いらなくねー!?」」

続く

感ひじて部活内容

「ああああ、部活をはじめじやないか

「ちよつ……ちよつと待て、展開が速すぎて追いつけないんだナビ

「ん、そつじよー

俺は今人生の岐路に立たされてる……と言つても過言ではない。
今しがた俺はこのボランティア部の部員になつた……らしさ。
あ、この部活がボランティア部だったことは、今さつき分かつたばかりだ。

「じゃあ部活じよつ。あ、部活はじめよつ

「もう……いよ。本当にきつこつよつ！」

負けた。心が折れた。こつやつと押し切られるのは今に始まつた事

じやない！ 頑張れ俺。

「じやあ、ここの部活の内容を教えるね

「ああ

「ん~

ボランティア活動をするんだが。ヒ、心の中で毒蜘蛛。

「ここの部活の内容は……ボランティア活動をする事です

やつぱりやつ。

「そ、れ、ヒ

おお、続きがあった。

「背中を押してあげる部活でーす

はあああああひひひひー？

「意味わかんねえよ！」

ガチで意味わからねえ！
いやつ、もう分からぬの域を越してゐ
ね。

○ダンスのスケッ○団と同じだよ！

何ですか？ 恋愛事情でも助けるんですか？

もうこれだとスケッ

「ああああ、今からその意味を教えるからそんなに興奮するな」と土郎が、つざつたいたなあという表情で俺をなだめてきた。

いやつ、興奮せずにはいられないだろ。
同じ立場になつて考えてみてよ。ありえないだろ。

とここで土郎が詰問のときの体勢は人一だったので
ひとあくびもして

「あうむか」
お墨染う。

「そして……自殺しようとしてる人かいたら、その人の背中を押し
てあげるのがこの部の役目です」

「へえそつなんだ～」

二
!

「こいつらああああつつー、 真の馬鹿なのか！？ いや、馬鹿でもこ

「なにが問題だ？」
「なにが問題だ？」
「なにが問題だ？」

わいんな部活！

こんなのが活しゃねえよ（泣）
そして俺はドアーに向かつてダッシュした。

タタツ（俺がドアに向かって走る音）

グブツ（俺が急にドアを開けて入ってきた人にぶつかる音）
ササツタツタツ（その人達が絨毯を素早く敷いて去つていった音）

「……つつ！」

あまりの鼻の痛みに声にならない悲鳴を上げながら、また立ち上がつた。

士郎は馬鹿にしたような目で俺の事を見てきて、佐奈は写真を撮っている

こんな状況で心が折れない俺、強いぜつ！

そして走り去るうとした時。

シユツヒドアーが開いた。

「あの、この部にお願いしたい事があつてきました」

なんという間の悪い時に来たんだああああつつ。

俺は一生恨む、神を

（なんでわし――――――？）

初依頼人の依頼内容

：部室

俺と、土郎と、佐奈と、神は、いましがたこの部に頼みたいことがあるところの少女を田の前にしている。

漆黒とかいう形容が似合ひ髪に、小学生と言われれば納得してしまいそうなほどの童顔、さらには背は145cmという、見た田は完全に小学生……この言い方には完全に語弊があった、胸だけ除けば小学生にも見える少女だ。そのせいいかさつきから佐奈は少女の胸を見て、自分の胸を見てため息をついているし、土郎は完全に口説きモードで対話している。

まあ、それはいい。百歩譲つてそれはいい。俺にとって一番問題なのは……

「何であんた見えてんだよおおおおおおおお！」

そう、俺の意識の中にしかいなはずの神が今日の前にいるのである。

服装もザ・神、つて感じの服装だし、例によつてあのバカでかい杖も持つている。

なのにこいつらは全く氣にもしない、そしてなぜか俺のほうを「何で急に叫んだの？」という感じの田で俺のほうを見ている。

「何でお前らこのクソ爺のことつこまねえんだよー。」

「え、聰史の知り合いじゃないのかい」

「聰史の知り合いだと思ってたなあ」

「…………」

「こいつら天性のバカだ。」と聰史は思った。

「まあ、一応紹介ぐらいしてくれないかい？」聰史

「そうだそうだ！」

「……はあ、分かったよ。」ちゅうは……えつと、あー、神様だ

「そうじや、わしは神じや」

「ふうん、神様なんだ。よろしく」

「へえ、これが神様か、よろしくお願ひします。まあここで話を戻そう、今回の依頼はなんだ……」

「ちょっと待てえええええええええツー！」

「そう叫ぶと佐奈、士郎、依頼人の少女はまた、「何で叫ぶの？」

という表情で俺を見てきた。

「いやいやいや、お前ら何ですんなりと状況を受け止めた？ 神つて言つたんだぞ俺は。なのにどうしてそんなに簡単に受け止めた？」「はあ……僕たちはまだこの人の名前も知らないんだぞ？ 少し黙つてる」

俺は、えーと呆然としながらソファーに腰を落ち着けた。そんな俺をよそめに神は「こんなにも物分りのいい奴らがおつたんか！」と丁度テレビがある隅のほうに行つて泣いている。

いやつ、もうこいつらのバカさ加減は筋金入りだな。と思つた。

「はあ……やつと本題に入れるな。あなたのお名前は何ですか？」

士郎が少女に名前を聞くと、その少女は少し恥ずかしそうに手を伏せながら静かに声を発した。

「えつと……く、来実です。よ、よろしくお願ひします」

「じゃあ、今回の依頼内容はなんでしょう？」「わ、私、やつちゃいたい人がいるんです！」

俺達がそれを聞いた瞬間、士郎は両方の鼻から鼻血を吹き出し、佐奈は柄にもなく顔を少し赤くしてなぜか俺のほうに熱っぽい視線を浴びせてくる。

もちろん、俺は何にもなってないぞ？ 勘違いしないでくれ、俺はこここつらとは違うからな。

「あ、おい聴史！ お主鼻からおびただしい量の血が出でるぞ！

？」

「……なつ、何じゃこりゃあああああああッ」

お決まりのセリフを叫びながら俺は茫然とした。お、俺がこんな奴らと、こんなバカどもと同じなんて！

と、士郎がまだ鼻から血を出したままで、その少女 来実と向き直った。

「えつと、ですね。それはどんなシチュエーションがお好みでしょうか？」

「えつ……？ あ、えーと人ごみとかですかね」

「「「…?」」「」

「えつと、なぜ皆さんそんな驚いた顔をされているのですか？」「い、いえ、そうですか。格好はどんな感じがいいのでしょうか？ たとえばメイド服なんかでしょつか？」

「え？」

「そ、それとも裸エプロンですか！ それとも拘束具ですか！」

「え？」と来実は不思議がっていたが、士郎が何を聞いているかを察し、顔から湯気が出そうなほど真っ赤になつた。

「ちつ、違いますよー。やうこつ『やる』ではなくて、いつの『
殺^やる』ですよー。」

と、言いながら空中にナイフのようなものを描き、それを掴んで
ものに突き刺すぞぶりをした。

「…………え？ ええええええええええええええッー。」
「お主ら何を想像しとると思えば、とんだ変態じやのう」
「あんた来実さんは『人を殺すお手伝いをしてください』、って言
つてんだぞー？ よくもまあ、そんなのんきでいられるなー。」

「つ～む、わしならそんないと容^ゆるじやからなあ

「え？」

続く

初依頼人の依頼内容（後書き）

これから時間があるときはこれも続けようと思つてるので。
遅くなりましたが、お読みいただければ幸いです。

せりと立つた神

「 「 「ええつー?」 」 」

俺が驚いたキッカリ五秒後に俺以外 士郎、佐奈、来実が素つ
頼狂な声を上げた。

そのまま硬直すること十秒、士郎たちはあり得ないといつ表情で
神を見つめた。

「何じゃお主ら、わしの言つことが信用できるのか」

「 「 「うん」 」 」

「お主ら酷いの、わしきはあんなにすんなりわしが神である」と
を受け入れたではないか、なのにどうして不思議そうな顔をする?」

神がそう言つと、（あ、俺知らない間にジジイって呼ばなくなつ
てる）士郎たちは呆れた顔で互いに見つめあつた。どうやらまだ信
用できていらしい。

「お前らこいつが神つてさつき受け入れたよな?」

「お主わしのことをこいつ呼ばわりしよつたな! いいか覚えてお
くんじやぞ! お主にどんな災難が降ろうとわしのせいじやないぞ
! 本当に覚えておくとつ」

「ふん」

「ぐふうつー」

神のお小言がまだ続きそつたので、思いつきり神の鳩尾を蹴
り飛ばした。うーん、改めて考えるとこれ神への扱いじゃないよな、
まあいいか、もともとマイシのことを神と思ったことはないし。

神は俺の蹴りに悶絶して床をのたうちまわっていた。うん、ほつとこひつ。

「とりあえずさあ、最初受け入れたときはどう思つて受け入れたんだ？」

俺がこう聞くと、士郎は「それを言わせるかあ？」といふ呆れ顔になつた。

「うーん、イケメンは何をやつても様になるなあ。呆れ顔が決め顔に見えてくる。…… さすがにそれは無いけど。べ、別に褒めてるわけじゃねえし。

「んで？ どう思つて受け入れたんだ？」

「聴史の古い友人」

「どうしてそうなる！？ じゃあ、こいつの歳はどんぐらいに見えるんだよー。」

と、俺はまだ床にのた打ちまわつていた神の髪の毛を掴み……別にギヤグじゃないよ。そこらへん勘違いしないでね。それを引っ張り上げて神を無理やり立たせ、士郎の目の前に神の顔を見せつけた。神の髪の毛つてさつらさうしてるんだな。うーん、新発見。

「ほら、どうなんだ。これが俺と同一年に見えるか？ え？」

「うーむ、士郎の古い友人だとすると……ざつと、十七歳ぐらい？」「このしわくちゃな顔で！？」

「もちコース

「俺こんな古い友人持つてねえから！ というかお前、俺が老人嫌いなの知つてんだろ！」

と、神の顔をブンブン前後に振つて、俺は士郎に猛然と抗議した。

が、そんな俺の様子を気にすることもなく、土郎は言葉を続けようとした。

……これが友達に対する態度なんだろうか、ここでの心はエイリアンよりも冷酷だな。

「…………聰史…………もう、ギブ…………アップ…………じゃ

あ、神のこと忘れてた。ちなみに土郎に抗議している間も、神の顔を前後にブンブン振り続けていた。完全に衰弱しきつた神に十字架を切つてから 激しくソファーに叩きつけた。

「ぐぼふうつ…………」

気にしない、気にしない。俺は気持ちを切り替え土郎に向き直つた。もちろん神は放置プレイ。何でも切り替えが大事だね。いい言葉だよ、切りかえつて。

この間ざつと二十秒。俺が神をソファーに叩きつけるのを見届けてから土郎は言葉をつないだ。

「まあ、古い友人と思つてたのは確かだ。違うのかい？」
「当たり前だろ！」

俺は仕切りなおすよつに怒鳴つてから、

「あんな、俺この前死んだだろ？」

「…………」

土郎は急に顔を俯けた。まあ、さつきの話からこんな重い話になるとはだれも思わないからな。実際大して重くないんだけどな。

「その時生き返してくれたのが　　「わしじゃ！」

突如。

俺の顎にアツパークットを決めた神が、その老いた体を俊敏に動かし、吹っ飛んだ俺の鳩尾のあたりに乗つかつてきた。

さすがに士郎もこの俊敏さには驚いたらしく、「え？」と間の抜けた声を出していた。

……というか痛つてえ！ やべえ、神の力つてやばいの忘れてた！ というか重い！ すさまじく重い！ タンクローラーでもこんな重くねえぞ。

「どけ！ 糞ジジイ！」

「それが神にものを頼む態度なのか？」

ぐわあああああッ！ つぜえええッ！ だが、仕方がない謝らないと死ぬう！

俺は神に対しての敗北感に打ち震えながら切実な願いを込めて『3年B組金〇先生』のワンシーン風に謝つた。

「おお願いします！ どいてくださいー！」

一瞬の沈黙

「やあなこつたあ（￥へ へ／＼）」

そしてこのまま俺は意識を失つた。

以下余談。佐奈がこの一連を見ている途中、依頼人・来実に「ま

た明日来てください」と言つて来実に帰つてもらご、そのすぐあと佐奈も帰つた。そして、氣を失つた俺のことは、士郎が担いで家まで連れて帰つてくれたらしい。神は、士郎が俺のことを担ぐその一瞬の隙をついて消えたらし。

こんなグダグダでいいのかと思いつつも、続く。

- ・付録

- 作者と士郎の対話。

(作者)「次は、絶対に依頼のことをついて触れてね」

(士郎)「もちろんやあー!」

(神・聰史)「やつぱこひなえよ、この付録ー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212x/>

神は俺を不幸にした。

2012年1月5日19時52分発行